

- 地球儀をまわして半球部分が陸地の多いところと、海の多いところに分けて、陸半球（中心はほぼパリ付近）と水半球（中心はアンチポデス諸島）に分けられることに気づき、日本はその境目にあることをとらえる。
- 地球儀を机の上に置いて、だいたい東京の真上に目をおいて視界にはいる範囲をノートに略図で描かせ、日本を中心とした半球のようすととらえる。略図を描かせることによって、わが国の位置関係を印象的にとらえる。
- (2) 四方位の物差しを作り、方位で世界の国々の位置関係をとらえる。
- 2本の紙テープを地球儀の円周の長さで切り、まん中で直角にまじわるようにはり合わせた四方位物差しを作り、まじわったところ（中心点）を東京の上におく。その一方のテープは東京を通る経線の方に合わせる。これは東京からみた南北方向をさす。もう一方のテープを地球儀上に当てると、これは東京の東西方向を示す。こうして日本の東や西の国々を調べる。
- 物差しの中心点をワシントンやロンドンにおいて、これらの地点からみた日本の位置関係をとらえる。
- メルカトルの世界地図に、東京からみた東西南北方向を図示し、この地図上では、東や西の方位が誤解されやすい点に気づく。

メルカトルの地図で見ると、サンフランシスコは東京の真東に当たるように思えるが、これは誤りである。東京からみてサンフランシスコは北東に当たり、サンフランシスコからみた東京の方位は北西である。このような不都合は、二地点を通る経線が平行していないことから起こるのである。

A点から見たB点の方位は、A点を通る経線とA・B間の最短経路（A・Bを通る大圏）とがA点においてなす角のことである。北の方向が平行していると思わせがちな円筒図法による世界地図が方位概念を混乱させている。われわれは地図の上に生活しているのではなく、地球の上に住まっているという事実を自覚しなければならない。

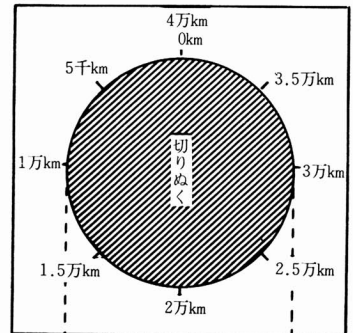
(3) 二地点間の最短経路（大圏）を見つれたり、その距離を測る。

- 四方位の物差しの中心点を東京の上におくと、4本の紙テープの先端は地球儀の裏側の一点で合

わさる。この地点は南大西洋上の西経40度、南緯35度付近で、東京の対蹠点である。この二地点の距離は2万kmである。

二地点間の距離を求めるには、二地点を通る最短経路（大圏）にそってその長さを測り、赤道上の目盛りでそれは何度に当たるかをみて、その度数に111km（4万km÷360度）を掛けるとよい。

- 右の図のように地球儀に外接する円形の部分を切りぬいた厚紙に目盛りをつけておき、これを求める2地点に当てると、目盛りで度数を読み取ることができると、111kmを掛けると、2地点間の距離がわかる。



地球儀での距離の測定  
(文獻③ P173より)

ただし、これは卓上地球儀でないと測定用の厚紙が使いにくい。最近では、地軸のない回転が自由な地球儀が市販されている。

## 5 おわりに

地図は本質的に地球儀の代用品である。地球儀を小学校の段階から活用したり、日常生活の中に地球儀を取り入れていくと、地図のひずみの理解は容易になる。地球儀に親しませ、地球儀上での観察や計測を繰り返して、その印象を確かなものにしていくことが、球としての世界の認識を育てることになる。話題に応じていつも地球儀が登場してくる、いわば地球儀のある学校生活・日常生活を生み出していききたいものである。

(参考文献)

- ① 指導のための地図の理解 野村正七 中教出版
- ② 地図の研究 昭和54年1月号 帝国書院
- ③ 現代地理教育講座(5) 古今書院